# スワーミー・ヴィヴェーカーナンダと

# シュリー・ラーマクリシュナの関係

### 2014年2月16日

### 逗子例会

### スワーミー・メダサーナンダによる講話

### 於・逗子協会

シュリー・ラーマクリシュナは、あるビジョンを得ました。それは、インドの聖典で称えられている七聖賢（Saptarishi）が瞑想に没入しており、そのうちの一人がスワーミー・ヴィヴェーカーナンダであるというものでした。ヴィヴェーカーナンダの母親は、娘ばかりで息子に恵まれませんでした。そこで、シヴァ神に祈りを捧げて家族の誉れとなる息子が授かるようにとお願いし、また、聖地ヴァラナシに住む親戚にもヴィレシュワラ・シヴァを礼拝するよう頼みました。すると、シヴァ神が自分の息子となって生まれると答えた夢を見ました。シュリー・ラーマクリシュナは後に、ヴィヴェーカーナンダがシヴァの化身であるビジョンも得た、とよく言っていました。このようなことから、スワーミージーは七聖賢ナラの化身として、またシヴァの化身として生まれてきたと考えてられています。

化身は、元の存在・元の神が有する特徴を備えています。例えば、ヴィシュヌの化身は、ヴィシュヌの性質や特徴を備えています。ですから、スワーミージーには聖賢ナラと神シヴァの両方の特徴が備わっていました。ナラの特徴には、知識、霊的な愛、強い信仰心、サマーディーなどがあります。シヴァの特徴は、瞑想、サマーディー、放棄、慈悲心などで、短気な面もありますがその怒りは静めるのがたやすく、いったん怒りが静まるとすぐに慈悲深い面を表します。ナラとシヴァには共通した性質もあります。スワーミージーにも、知識、霊的な愛、強い信仰心、サマーディー、放棄、慈悲心などの性質が見られ、短気でしたが、怒った次の瞬間には心に愛と慈悲が満ちていました。

シュリー・ラーマクリシュナには出家の弟子が他にもいましたが、ナレンドラナートには特別な敬意を払っていました。自分に仕える召使のような仕事は、通常、ナレンにはさせませんでした。それだけでなく、誰かがナレンを批判すると、それはシヴァを批判するのと同じだと言ってその人を叱りました。時には、ナレンと友達であるかのようにも振る舞いました。また、ナレンが理想からそれていると指摘する人がいると、そのような話を信じようとしませんでした。スワーミージーは、両親が自分を信じようとしない時でもシュリー・ラーマクリシュナはいつも信じてくれたと言ったことがあります。実際、師がスワーミージーに対して示した愛の大きさや深さは、両親の愛でも適いませんでした。

またシュリー・ラーマクリシュナは、ナレンの成長のためにナレンに大いに自由にさせ、ナレンが自信を強められるような状況も作ってやりました。ナレンという岩を礎として、将来、師の、すなわち神の組織が設立されることを知っていたからです。ナレンに、霊的訓練や、ニルヴィカルパ・サマーディーなどの霊的経験も数多く授けました。ニルヴィカルパ・サマーディーの状態に達すると、瞑想と瞑想者、瞑想の対象の区別は全くなくなり、これら三つが一つになります。シュリー・ラーマクリシュナの恩寵により、ナレンはこのサマーディーを経験しました。

時折、師はナレンを試すこともありました。一度、ナレンに超能力を授けてやろうかと言ったことがあります。お金や名声、権力や地位を得たくて、超能力を欲しがる人は数多くいます。ナレンは師に、超能力は悟りを得る助けとなるかと尋ねました。「いや、全く助けにならない。それどころか妨げとなるだろう。霊的経験の邪魔になる」と師が答えると、ナレンは「それならば、今は必要ありません。そのような力は自分で得た上で使うかどうか決めたいです」と答えました。

別の折には、師はナレンと口をきくのをやめました。それまでナレンに対して愛情と気遣いを常に見せていたのに、急に無視し始めたのです。他の信者には話しかけても、ナレンの存在を認めることすらしませんでした。遂に、師はナレンに対し、自分が話しかけさえしないのに、なぜ来続けるのかと尋ねました。ナレンは即座に、師の話を聞きに来ているのではなく、師が大好きで会いたいから来ているのだと答えました。これを聞くと師は大変喜んで、実は、特別扱いに慣れていたナレンに特別扱いをしなくなったら、来なくなるかどうか試したのだと白状しました。

一方で、霊的に完成した師であることをナレンに証明していた師に対し、ナレンは試すことをやめませんでした。時には、師の理解は正しくなく、師が言ったことはこの誤った理解から生じる想像を基にしていると、率直に言うことさえありました。「完全に確信できるまでは、あなたの仰ることを認めることはしません」とナレンは宣言しました。信者の態度には二通りあります。一つは、霊性の師の言うことを真実だと受け入れる態度で、たいていの信者はこのタイプです。もう一つは、「あなたの言うことを私自身が本当に理解して実感するまでは、信じません」というタイプです。ナレンは後者のタイプでした。

ご存知の通り、シュリー・ラーマクリシュナは、お金に触れることすら耐えられないと言ったことが何度かあります。ある日ナレンは、師のベッドの下にこっそり硬貨を隠しました。師は部屋に戻って来ると、お金が隠れていることを知らず、ベッドに触れました。その途端、まるで感電でもしたかのように飛び退きました。師はすぐに、ナレンが自分を試したのだと気付きましたが、迷惑に感じたり怒ったりすることはありませんでした。師自らナレンに、自分の言うことを試しなさいと言っていたからです。

また師は、不純な性質の人が運んできたコップから水を飲むことはできないと言っていました。ある時ナレンは、師や他の人と一緒にコルコタに行きました。霊的な話をしばらくした後、師は喉が渇きました。その場にいた、いかにも心の清らかそうな人が水の入ったコップを持ってきましたが、師はそれを飲むことができませんでした。次に他の人が持ってきたコップから、師は水を飲みました。この行動を不思議に思った人が何人かいたので、ナレンは後で理由を確認しようと言いました。集まった人たちのほとんどが帰った後、先ほどの心の清らかそうな人の弟に、「お兄さんはどんな人なのですか」と誰かが尋ねました。弟は少しためらいながら、「兄はあまり善い人間ではありません」と答えました。こうして、師の言葉はやはり本当だったと分かりました。こういうことが何度もあった後、ナレンはやっとシュリー・ラーマクリシュナを自分のグルとして認めたのです。

ナレンが通っていたコルコタの大学で、キリスト教徒であるベンガル人が教えていました。ナレンの性格や知性はどの教師にも高く評価されていました。ナレンがドッキネッショルのカーリー寺院の祭司の弟子になったという噂が広まると、このキリスト教徒の講師は、これ程優秀な生徒が寺の祭司をグルと認めるなんて、と大変驚き、悩みました。ある日ナレンを見かけると、この講師は近づいて行って、カーリー寺院の祭司をグルとしたのは本当かと尋ねました。ナレンが本当ですと答えると、講師はその理由を聞きました。ナレンは、「この祭司をいろいろと試したのですが、結局、グルと認めざるを得ませんでした」と答えました。

この時、ナレンはシュリー・ラーマクリシュナを自分のグルと認めていましたが、師がアヴァターラ（神の化身）であるという考えはまだ受け入れていませんでした。他の信者は全員、師をアヴァターラと認めていましたが、ナレンはまだでした。シュリー・ラーマクリシュナ自身が、自分を「アヴァターラだと多くの人が言っている」と口にしており、ナレンにもそう思うかと尋ねたそうです。ナレンは、「自分でそれを直接体験するまでは、そのような考えは受け入れません」と答えました。

師が肉体を去る数日前、衰弱して何も食べられなくなり血を吐いていました。師のベッドの傍らに立っていたナレンに、ふとある考えが頭をよぎりました。「この人は本当に神の化身なのだろうか。もしこのような健康状態でも自分は神の化身だと仰るなら、そうだと認めよう」ナレンが答えを見出せないでいると、ベッドに病に伏しているラーマクリシュナの唇がゆっくりと動くのに気付きました。師は言いました。「過去世でラーマやクリシュナとして生まれた神が、今ラーマクリシュナとしてまさにこの肉体で生きている。ただし、お前のヴェーダーンタの観点ではそうではないよ」なぜヴェーダーンタではそうではないのでしょうか。ヴェーダーンタでは、神の特別な化身をいっさい信じず、誰もが皆ブラフマンの現れだからです。

師は肉体を去る少し前に、ナレンと二人だけになりたいと言いました。師がナレンの目を見つめると、二人は意識を失ったようになりました。しばらくしてナレンに意識が戻ると、師が泣いているのが見えました。「なぜ泣いていらっしゃるのですか」と尋ねられると師は、「持っていた力はすべてお前に与えたよ。この力を武器に、すべての人のために善を為しておくれ」とナレンに頼みました。

それよりさらに前のある時、師は紙切れにベンガル語で、「ナレンは人びとを教え導くようになる」と書いたことがあります。ナレンは反論しましたが、師は「お前は必ずそうなる」と言いました。師が肉体を去った後、師の使命を引き継いだのはスワーミージーでした。師はナレンに、主に2つのことをするように言いました。一つは、他の出家の弟子たちを導いて組織を発足させること。もう一つは、師の普遍の教えを説くこと。実際に、師が肉体を去った後、ナレンと他の弟子たちはバラナガルに最初のラーマクリシュナ・マト（僧院）を設立し、ナレンドラナート・ダッタはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダとなりました。スワーミージーは様々な方法で他の出家の弟子らを訓練しました。後に、ラーマクリシュナ・マトはアランバザールに移設されました。

1897年、海外から戻ったスワーミージーは、二つの目的と共にラーマクリシュナ・ミッションを創設しました。二つの目的とは、真我を悟ることと世界のために善を為すこと（Atmano mokshartham jagat hitaya cha）です。後に、常設のラーマクリシュナ・マト・アンド・ミッションの本部が、ドッキネッショルからほど近い、ガンガーの岸辺の村ベルルに1898年に設立され、それが現在のベルル・マトとなりました。

スワーミージーは、師の生涯において体現されたヴェーダーンタを説くために西洋にわたりました。多くの困難に遭いながらも努力してそれを乗り越え、ヴェーダーンタの教えを西洋に伝えたのです。後にスワーミージーは、「このシュリー・ラーマクリシュナという人が本当はどのような人だったのか分からない。が、これだけは分かっている」と言いました。「困ったことがあると師が必ず現れて私に道を示してくださった。危険があるといつも、師が守ってくださった。問題があるといつも、師が解決してくださった」

面白いことに、多くの人が知らないことなのですが、万国宗教会議がシカゴで開催されるのを聞きつけた南インドの弟子たちは、スワーミージーにヒンドゥー教の代表として参加するように頼みました。彼らは、このような重要なイベントにヒンドゥー教の代表者として参加するのはスワーミージーが最適であると思ったのです。この時、スワーミージーはこうしたイベントに無関心で、ヒンドゥー教の代表としてシカゴに行く計画もありませんでした。実は、スワーミージーは行くのをためらっていました。当時、ヒンドゥー教の僧侶がヴェーダーンタを説くために外国へ旅することは非常に稀で、歴史上前例もありませんでした。

スワーミージーは、このような旅に出るべきかどうか、メリットとデメリットを考えていました。ちょうどその時スワーミージーは南インドのある信者の家に滞在していました。この信者は後に、スワーミージーは一人で部屋にいたはずなのに、部屋からは二人の人が激しく議論している声がはっきり聞こえたと言っています。このような議論が聞こえてくるのが幾晩か続き、信者は好奇心をそそられてスワーミージーに聞いてみることにしました。「スワーミージーは一人で部屋にいらっしゃるのはよく分かっていますが、二人で話し合う声が聞こえます。どうなっているのですか」スワーミージーはすぐには答えませんでしたが、何度かせがまれこう言いました。「私のグル（シュリー・ラーマクリシュナ）が目の前に現れて、万国宗教会議に私が参加して成功を収めるように手はずを整えたと仰ったのです。私が行かないと言ったので、言い合いになり、私が行くと言うまで毎晩議論になったのです」

皆さんの中で、このことを聞くのはこれが初めてだという人がほとんどでしょう。スワーミージーが世界に向けて、師の教えである「普遍の宗教ヴェーダーンタ」を説きに行くよう、シュリー・ラーマクリシュナが万国宗教会議を準備されたのです。この素晴らしい土台を作られたのが師ご自身であると、スワーミージーに仰ったのです。万国宗教会議にスワーミージーが参加なさったことで世界の宗教史がこれ程までに変わった理由がこれで分かりますね。このことからも、神様にはご自身のやり方や計画があり、それが示されるまで私たちには見当も付かない、というのがはっきりと分かります。

スワーミージーが欧米でヴェーダーンタを説いていた時、毎週四つから五つの講話を行い、日によっては講話を2回行うこともありました。講話をしすぎてテーマに尽きてしまい、新たに話すことがもうないと感じることもありました。そのような時には、スワーミージーの部屋から奇妙な声がしばらく聞こえてきた、とスワーミージーが滞在した家の信者から報告されています。その声はスワーミージーのものではなかったそうです。では誰なのでしょうか。師がスワーミージーに、次の講話で話すべき論点を与えていたのです。

インスピレーションに満ち胸を打つ講話でスワーミージーが有名になり人気を集めるようになると、キリスト教の伝道者らは反感を抱き嫉妬するようになりました。この理由は、キリスト教伝道組織の中にはインドで活動を行うための募金を裕福な人びとから集めている団体があったからです。彼らはインドについて、インド人は野蛮人で迷信を信じており、インドには真の宗教がないから、キリスト教を伝道して改宗させ暗闇に光をもたらすのだ、と言っていたのです。この目的のために裕福なアメリカ人は多額の寄付をしていたのです。しかし、スワーミージーの講話を聞いたり著書を読んだりして、こうした団体の宣伝や教えが嘘で、インドの霊的文化をほとんど理解していないということに気付き始めたのです。

スワーミージーのように教養ある優秀な人間が迷信深い野蛮人の国に生まれ育つことなどあるだろうかと、多くの人が疑問を持つようになり、こうした宗派に寄付するのをやめました。寄付が減ったためにこれらの宗派の聖職者らは非常に腹を立て、中には怒りのあまりスワーミージーの死を画策した者さえいました。あるディナーの席で、スワーミージーに毒入りの飲み物が出されたのです。スワーミージーは何となく飲まない方がいいような気がしていたところ、ラーマクリシュナが現れて飲まないようにと言ったのです。スワーミージーはそれを飲まず、ディナーの主催者には何も言いませんでした。こうして師は、スワーミージーが危険にさらされたり困ったりすると守ってくださったのです。肉体を去った後も、いつもスワーミージーのそばにいて面倒を見ていたのです。

スワーミージーがアメリカへの渡航直前に南インドにいたとき、母親が亡くなった夢を見ました。スワーミージーは動揺して真相を確かめたいと思いましたが、当時は通信が難しい時代でした。スワーミージーはベンガル人の信者マンマタ・バブーの家に滞在していましたが、この夢でスワーミージーがひどく心配しているのを知ったマンマタ・バブーは、コルカタに電報を送って情報を集めました。また、出航が近づいていたので、マンマタ・バブーはスワーミージーに、霊能力者に相談してみたらどうかと勧めました。数名の信者らがゴヴィンダ・チェッティという霊能力者を探しに行きました。

チェッティは、全身灰まみれの助手数人と火葬場に住んでいました。信者らの一行が近づいていっても霊能力者は目もくれませんでしたが、一行が立ち去ろうとすると「力になってやろう」と大声で言いました。そして突然トランス状態になり、「お前の母親は大丈夫だ。すぐに外国へ向けて旅立ち、ヴェーダーンタを説き広めよ。お前のグルがいつもそばにいて守ってくれている」と言いました。

スワーミージーは普遍の宗教であるヴェーダーンタを説き広めましたが、近しい信者との対話では、ヴェーダーンタよりもシュリー・ラーマクリシュナについてよく話しました。『ある弟子の日記（Swami Sishya Samvad）』という本があります。これはある僧侶とその弟子との対話で構成されている本ですが、実は、スワーミージーとその弟子のシャラト・チャンドラ・チャクラヴァティの対話です。シャラト・チャンドラはサンスクリットの優れた学者で、「Murta Maheswara」という歌を作曲した偉大な信者であり、スワーミージーからイニシエーションを授かりました。シャラト・チャンドラはこの本の中でこう言っています。「スワーミージーは、講話を行うときはたいていヴェーダーンタについて話されますが、個人的にお話しになるときはシュリー・ラーマクリシュナについてもっぱら話されますね。なぜなのですか」

スワーミージーは答えませんでした。が、その答えは、シュリー・ラーマクリシュナがヴェーダーンタを体現されていたからです。すなわち、ヴェーダーンタは抽象的なものですが、具体的なヴェーダーンタを知りたいのであればシュリー・ラーマクリシュナを見なさい、ということなのです。前述のように、スワーミージーは、師が神の化身かどうか疑っていました。しかし、私たちが夕拝で歌う「Om Hrim Ritam Tvam Achalo」をスワーミージーが作曲された時、歌詞には「Sthapakaya cha dharmasya, sarva dharma-svarupne; Avatara-varsthaya, Ramakrishnaya te namah」とありました。つまり、スワーミージーは師をアヴァターラと認めていただけでなく、神の化身らの中で師こそが最も偉大であると宣言したのです。